

〈他者〉を楽しみ続ける子どもを育成する体育科授業

体育科研究部

1 体育科における〈他者〉を楽しみ続ける姿

現代の教育で求められているのは、予測困難な社会を生き抜いていくための資質・能力の育成である。鈴木（2021）は、「子どもたちが教師の決まりきった指導や指示をそのまま受け入れるのではなく、未知なる環境の中を自力で歩みを進め、責任をもって進むべき方向を自分で見出す」ことの大切さを指摘している。

体育は子どもたちが好きだと答える教科の一つに挙げられることが多い。それは運動すること自体に楽しさを感じることもあると思われる。楽しく学ぶことは、子どもたちが主体的に学ぶこととは不可欠であるが、楽しく学ぶことと主体的に学ぶことは必ずしもイコールではないと考える。梅原（2019）は主体的に学ぶことについて、「個人が、諸条件によって抑圧されている状況（認識の未分化、判断の制約、行為の未決断など）を、課題解決が必要とされる問題として自覚し、その解決へ向けて動き出すことが主体性発揮の動因である」と述べている。運動の主体を育てていくことが体育の目標ではないかと考えている。一人一人の生涯にわたる運動・スポーツとの対峙の仕方は多様である。しかし、自らの判断に基づいて、自ら運動やスポーツに取り組めるようにしたいと考える。そのためにも、子どもたちが運動を楽しみ続けられる姿をめざしていきたい。

2 〈他者〉を楽しみ続ける子どもの育成に向けた体育科授業

本校体育部では〈他者〉を二点設定している。一点目は、学習で習得をめざす運動像を〈他者〉として捉えている。運動が習熟していく過程は、自分の外側にある技術を自分の内側の技能として獲得していく過程であると言える。新たな運動感覚に出合ったり、楽しんだりできることが運動を行うことの面白さではないかと考える。

二点目は、協同で学習を行う仲間としての〈他者〉である。友達の運動を見たり、友達の運動感覚を聞いたりすることで、それまで自分には無かった運動感覚と新たに出合えると考え。ボール運動のような集団で行う運動では、個人の動きだけではなく、チームの仲間との連動した動きが求められ、相手との関係の中でゲームが展開される。また、ゲームを行うためにはルールが必要とされ、このルールが運動の面白さを左右するものである。

上記の〈他者〉をもとにボール運動における学習を表1、器械運動における学習を表2、ルールに関する学習を表3のようにまとめた。

表1 ゴール型ボール運動における6年間の学習

低学年 【空間の発見】	・攻撃空間を見つけることができる ・攻撃空間に走ったり、ボールを投げたりすることができる
中学年 【空間の活用】	・仲間との合意（作戦）によって攻撃空間を作り、使うことができる ・防御の方法を使い分けることができる
高学年 【空間の創出】	・チームに合った作戦を考え、チーム内で合意することができる ・相手の攻撃や防御を予測して、作戦を選択することができる ・相手の攻撃や防御の方法によって動きの対応を変えることができる

試合の中で「どのように動いたらいいのか」を考え、仲間や相手との関係によってできる「空間」を認識し、その「空間」を仲間とともに活用できることを学習する。

表2 器械運動における6年間の学習

低学年 【自分の体を知る】	・動きのポイントを押さえて、体幹操作やいろいろな動物歩きができる。 ・腕支持の感覚、逆さ感覚、回転の感覚などさまざまな運動感覚をつかむ。首の操作による身体操作の感覚をつかむ。
中学年 【自分の体を使いこなす】	・マット運動の回転系、転回系、バランス系、ジャンプ系それぞれの技を組み合わせた連続技ができる ・首の意図的なコントロールによって、体を切り返したり、回転させたりするタイミングがわかる
高学年 【友達と動きを合わせる】	・跳ねるための着手時の姿勢や体の反りをうみだすための首や足の操作の仕方がわかる ・友だちとリズムやタイミングを合わせて、グループで技を合わせることができる

低学年から、基礎感覚を養う運動を経験することで、自分の体の動かし方を認識し、身につける。中学年では技と技の組み合わせ、高学年では友達と動きを合わせるための体の使い方を考えることで、体を使って表現することの面白さや可能性を広げる。

表3 ルールに関する6年間の学習

低学年	・ルールを守ることの意味を考える
中学年	・さまざまな運動・スポーツのルールを知り、体験しながら、ルールによっておもしろさが作られていることを知る。
高学年	・自分たちに合ったルールを考えたり、合意したりすることができる。

ルールの基本は合意であると考え。何のために、どのようにルールを変更したり、つくったりするのかを子ども同士が考えることができるようにする。